

Problem Solving

Case 6



子どもへの学習支援と一緒に作って食べる子ども食堂

アソシエーション **てらこや**
こどもごはん

緑区

課題1 | 活動目標の決定・役割の設定と運営

課題2 | 活動内容・役割方法

課題3 | **団体運営**
場の確保・資金の確保・広報周知

課題4 | 子どもとの関わり

子どもへの学習支援と一緒に作って食べる子ども食堂

アソシエーション **てらこや** こどもごはん



小学校での学習ボランティアの経験から、教室の中では学習についていけず置いて行かれる子どもがいることに気づき、少しでも子どもたちの力になればと思い、同級生の母親2人で学習支援をはじめました。活動していく中で、子どもたちの生活面、特に食生活について気になり、子どもが自分で食事を作る力も育てようと「こどもごはん」も開始しました。

この方にお聞きました

PROFILE

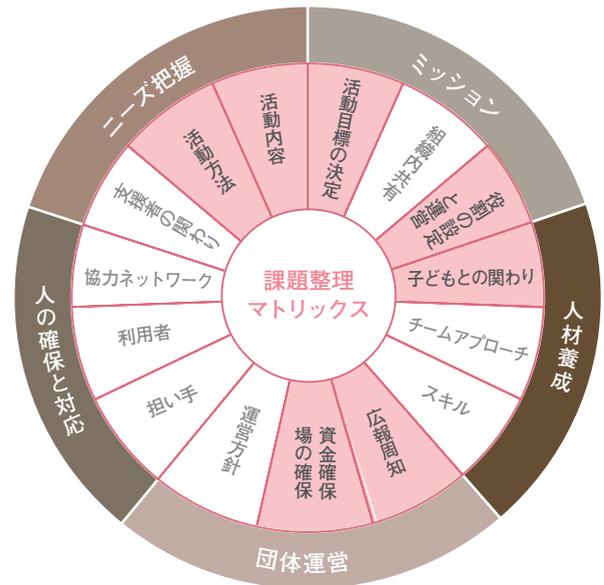
高橋 康子さん (57歳)

ワーカーズコレクティブ「ひまわり」代表。活動のきっかけは、児童養護施設の家庭教師ボランティアに参加したこと。子どもがその時代の社会で生きて行けるよう育てることは、親の役割であり社会の役割だと思っている。生きる力をつけてもらいたいと思うから「てらこや」に来る子どもたちにも、厳しく言うようにしている。



酒井 朋子さん (52歳)

教師を志望し、中学・高校の数学非常勤講師を務める。数学を教える一方で、生徒一人ひとりの困りごとが気になり、支援活動に興味を持つ。結婚・出産を機に退職し育児サークル運営・自治会・子供会に関わり地域で子供を育てることの大ささを実感する。小学校で読み聞かせボランティアを立ち上げ、学習ボランティアにも参加。高橋さんとの出会いから土曜塾を始めることに。現在、発達障害・インクルーシブ教育・支援員の勉強をしながら、自宅でも「てらこや」を開いている。



活動のきっかけ

高橋さんと酒井さんは、それぞれの第1子が同級生で、15年来のママ友達。子どもたちが通学していた三保小学校で、地域に向けて学習支援ボランティアの募集をしており、それに高橋さんが応募。最初の年は先生が事務局でしたが、翌年は、ボランティアが事務局を担うことになり、高橋さんが事務局となり、地域コーディネーター1期生として活動を始め、後に酒井さんも一緒に活動することになりました。

当時(2008年)、三保小学校はPSY(パイオニアスクール横浜)に指定され、学習ボランティアが授業のサポートに入ることで地域の力を活かした教育を目指しており、素晴らしいことと思って参加しました。実際に学校で授業に入ると、35人のクラスの生徒たちの中で、学習が理解できないままに取り残されていく子どもがいて、このような子どもをサポートするために、学習支援ボランティアの活動に意義があると実感しました。

しかし、先生と学習支援ボランティアがサポートに入り授業を進めることは容易なことではありません。残念なことに、学習ボランティアが活用されたのは、たくさんある授業のなかで一部。すべての先生にボランティアを活用してもらうには至りませんでした。それでも、九九の聞き取り、ミシンのサポートなど、ちょっとした学習のサポートを行ってきました。

発足から5年で、学習ボランティアの活動は、家庭科(調理・

〈てらこや〉	
開催場所	ハーモニーみどり（緑区福祉保健活動拠点）
開設年月日	2014年4月
担い手	2名
参加費	6か月1000円
活動内容	<input type="checkbox"/> 算数、数学の学習支援（小学3年～中学3年） 利用条件：塾や家庭教師を利用していないこと 毎週木曜日 ① 17:30～（小学生）10名 ② 19:00～（中学生）4～5名

〈こどもごはん〉	
開催場所	生活リハビリクラブ鴨居
開設年月日	2015年
担い手	4名
参加費	子ども100円 おとな300円
活動内容	<input type="checkbox"/> 子どもと一緒に昼食づくり 毎月第2日曜日 11:00～13:00

ミシンなどのサポート）・安全サポート（火や刃物を使うときのサポート）・課外授業（引率のお手伝い）、他にも必要な時にということになり国語や算数といった教科学習のサポートは辞めることになりました。

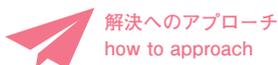
一方、学校で補習塾「土曜塾」を月2回第2、第4土曜日に開くことになり、学習支援ボランティアの活動の場が、追加される形になりました。しかし、土曜登校が増え、土曜塾が月1回に減り、それをきっかけに、「自分たちで学習支援をしよう」と考え、学校にPRなどに協力して頂き、2014年「てらこや」を始めました。

最初は、生活クラブ生協の会議室を無料で借りて行っていたのですが、会議室が閉鎖されることで、ハーモニーみどり（緑区福祉保健活動拠点）を借りて活動しています。学習支援を始めてからは年末年始以外、毎週木曜日の夕方、活動を続けています。

課題1

活動目標の決定 役割の設定と運営

I 比べられて育つ子どもの育ちへの影響



子どもたちがのびのびと学び成長できる場づくりを

本来、学ぶということは、それぞれの子どもが学びたいと思うことを学ぶことであり、全ての子どもに同じことを出来るようにすることではないと考えています。勿論、学びに興味関心を待つよう、学ぶ事は楽しいことなんだと実感できるよう働きかけも大切ですが、「できるようになる」ではなく、子ども達が一生懸命考えどう取り組んだかが重要だと思っています。

「てらこや」は少人数異学年が一つの部屋で「ごちゃまぜ」に勉強しています。そこには、せっかちな子もいれば、時間をかけてじっくり取り組みたい子もいます。授業についていくのが難しい子、逆に学校で教えてもらうことだけでは物足りない子がいったり、お母さんや兄弟と一緒に来ることが出来る子もいます。学年を分けることなく、いろいろな子がいるということは、まわりと比べることがなくなり、ありのままの自分で学ぶことができています。比べる、評価するは本来の学びの妨げになると改めて感じています。

「てらこや」では、小学校の算数、中学校の数学の復習・補習

をしますが、必要に応じて数理パズルや思考する楽しさを味わえるような問題を出しています。開始当初は算数の学習につまづき、自己肯定感が下がってしまう子どもたちの力に少しでもなればとの思いで始めました。活動を通じて全ての子どもたちに、自由にありのままに学べる場、その子の持っているものを評価するのではなく、そのまま価値があると受け入れてもらえる場所が必要だと感じ活動しています。

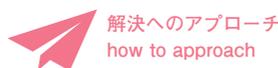
保護者（親）とのかかわりを大切に

てらこやでは、子どもとの関係だけでなく、親との関わりも大切にしています。

てらこやには、様々な学びの場の情報をキャッチして、自分のこどもに合った学習をさせたいという意識の高い家庭の子ともいます。一般の塾には行きたくないけど、てらこやなら楽しく通える子、体力、気力が不安で自分のペースで学びたい子、同学年では他の子と比べられて嫌だけど異学年だとのびのび学べるという子など、様々なタイプの子もいます。

入会の際には、保護者と面談をして、「てらこや」は塾とは違う学びの場であることを理解してもらうようにしています。また保護者には、入会後も気になったことを共有するばかりではなく、ポジティブエピソード・・・子どもたちが一所懸命取り組んでいること、がんばったこと、楽しかったこと、てらこやに来て変化した様子なども、電話やSNSで伝えています。

II 学力だけでなく身につけて欲しいこと



社会で生きる力を養う

社会情勢が変化し続けている中、生きにくい社会と感じている大人が多いと思います。人間関係が希薄になると、地域社会とのつながりを広げ、深め、豊かに生きることにイメージも持てないかもしれません。

「てらこや」では学習だけではなく、子どもが社会でたくましく生きていけるよう、どうしたら自分の良さや努力を認めてもらえるかの「術」を伝えています。提出期限を守ることや先生が認めてくれることもある。点数につながってなくても、その子なりに努力したことが伝われば理解してもらえます。社会で生きるための力をつけて欲しいと思っています。

想いを打ち明け、気持ちの整理をすること

子どもと雑談をしていると、素の顔が見え隠れします。大切な話にも何気ない話にも耳を傾け、聴くようにしています。自分の話を誰かにゆっくり聴いてもらえる環境は全ての子どもの必要です。子どもたちの中には、親には心配かけたくないとか、理解されにくかった時など面倒なことにもなりかねないし、怒られることだってある…等で、心のうちを明かさない、明かせないこともあるようです。学校の先生には、成績に影響するかもしれないし、レッテルをはられる気がする等で、やはり、なんでも話せる対象にはなりにくいとも感じている子もいます。

人が何かに葛藤したとき、誰かと共有したいと思うことがあります。伝える側が、自分のことを話しながら、起こっていることを整理し、話している相手に意見を求めることもあります。自問自答しながら、解決策を見出すのです。てらこやは子どもたちにとっては先生でもない、親でもない、利害関係のない斜めの関係でありたいと思っています。

課題2 | 活動内容・役割方法

I 子どもたちのニーズに対応する「子ども食堂」



解決へのアプローチ
how to approach

いわゆる「子ども食堂」は子どもに食事を用意してあげている場所だと思います。しかしそれよりも、子どもたちが自分で食事を作ることができるよう、家にある野菜を食べられるようになって欲しいと思い、作って食べる「こどもごはん」を始めました。

II 生活力を身に着ける支援と方法



解決へのアプローチ
how to approach

食の提供から食事作りのチカラを身に着ける場に

具 体 策

最近「子ども食堂」の取り組みが広がり、無料で子どもたちに食事を提供しているところが多くなりました。「こどもごはん」の活動ができるのは月1回、1食100円で、子どもと一緒にお昼ご飯を作ります。食生活によって健康を維持していくことは、とても大切です。

子ども達自身が食事作りをできるようになれることが、生きる力を身に着けることになり、それを教えることができたらと思いました。会場は生活クラブのデイサービスを使わせて頂いています。

子どもでも自分で作れるよう、包丁とガスコンロは使いません。まず、野菜を洗うところから始めます。野菜を手でちぎったり、はさみを使ったりして、電子レンジ・ホットプレート・オーブントースターで調理します。味付けも、ポン酢やごまだれなど市販の製品を活用します。そうすることで家にある野菜を自分たちで調理し、食べられるようになります。また、みんなで作ってみんなで食べることで、食の楽しさを知ること大事なことと思っています。食後は自分が使った食器は自分で洗います。

課題3

団体運営

場の確保・資金の確保・広報周知

I 場の確保 どこで活動するか



解決へのアプローチ
how to approach

公的機関の協力で無料で定期的に利用できる場の確保

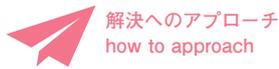
「てらこや」は、緑区福祉保健活動拠点「ハーモニーみどり」の夜間の時間を毎週、定期的に使わせてもらっています。無料で借りられていることは何より助かります。活動の継続に場所が



あるということはとても大事です。ロッカーもあり、教材も保管できます。

「こどもごはん」は、生活リハビリクラブ鴨居運営会議とワークーズコレクティブひまわりの共催という形で、生活リハビリクラブのデイサービスが休みの日曜日に会場を使わせてもらっています。調理器具も揃っていて、とても助かります。

Ⅱ 資金確保 活動費をどうするか



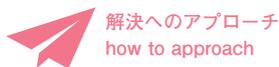
活動費は助成金と参加費で賄う

「こどもごはん」を始めた頃、緑区の地域課題チャレンジ提案事業に選ばれ、3年間は助成金を受けることができました。そのことから「こどもごはん」のチラシを作成し学校に配布することができるようになりました。区役所の生活支援課とのつながりもできました。

「てらこや」は助成金で教材を揃えています。ほかに必要なものは、半年1000円の参加費で賄うことができます。

一方、「こどもごはん」はお米と野菜の寄付のおかげで、子ども100円、大人300円の参加費で賄うことができます。

Ⅲ 広報周知 活動を知ってもらうには



公的機関の広報誌等の活用による周知

緑区社会福祉協議会で区内の学習支援を紹介する広報に載ったことで、問い合わせがあり、参加するようになった子どももいます。あとは口コミで広がっています。現在参加者は、「てらこや」で小学生10名、中学生4、5名程度です。少人数異学年が実現できる調度良い人数です。

「こどもごはん」は参加人数が安定していません。誰も申し込

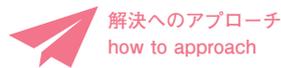
まない日もあれば、10数人参加する日もあります。

団体運営は、無理せず続けること

学習支援は高橋さんと酒井さんの他に、学習支援では、学生ボランティアが1名、こどもごはんは高橋さんと生活クラブの仲間の4人で運営していますが、特に困ったことはありません。勉強にとどまらず、子どもたちを応援したいという想いを共有できる方と一緒にやって行きたいと考えています。今まで活動してきた小学生が一人だけという年もありました。大切なのは人数ではなく目の前の1人を大切にすること、子どもたちへの思いを持ち続け、無理なく長く続けることだと思っています。

課題4 | 子どもとの関わり

I 見守る、寄り添う大人の存在



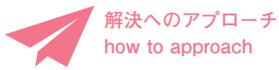
評価されない、子どもが安心できる時間を

現代社会は、可視化できるもの、点数化できるもの、生産性のあるものばかりに価値を見出そうとします。学校も社会も与えられたことをこなせる子、教えられたことを再現できる子が優れていると勘違いしています。

「てらこや」や「こどもごはん」の活動を通して感じることは、テストの点数や学習の評価など、可視化できるものばかりが成長ではないということです。子どもたち自身が、居場所で仲間や支援者と共にやるべきことに気づき、それができるようになった時、子どもたちは喜びを感じ、自信を持ち、仲間と共にいることに幸せを感じます。私たちがそんな場に会ったときには、子どもたちを、精一杯褒めて、自信を持ってもらいたい、自己肯定感を育みたいと心から思っています。



II もっと多くの子どもの居場所が増えていくように



他の居場所づくりへの協力

自分たちの活動を大きくすることよりも、私たちの活動に興味をもって来て、他の場所で、自分の地域で活動を始めたいという方が増えていくことが大切だと思います。社協のボランティア講座などでの報告や見学を頼まれた時は、それをきっかけに新たに始めてくれる人がいればと思います。

多くの居場所があることが大切だと思います。また、居場所を作りたいと思っている方もたくさんいます。酒井さんは障害者と健常者を分けることなく共に過ごすことがすべての人が幸せになり豊かな社会になると、共生社会の啓発活動もしています。高橋さんはハーモニーみどりの休館日に子どもたちの月1回の居場所づくりのために、NPO等分科会に声をかけ、有志を募るなど、それぞれ異なる活動支援も行っています。



取材を終えて

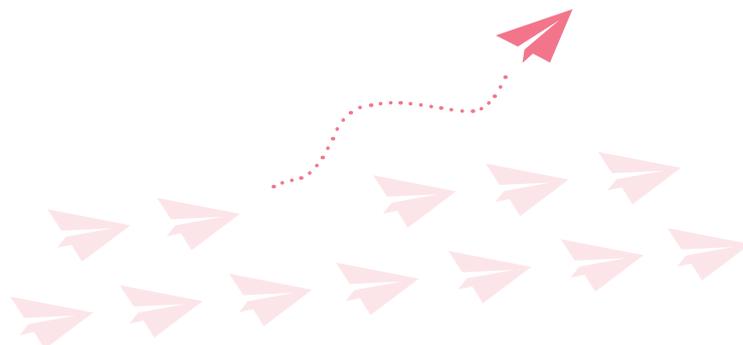
担い手の2人は、小学校の学習ボランティア当時から仲間、学習支援の目的を学力の向上という点だけでなく、社会で生きていく力をつけることに主眼を置いています。

子どもにとって大切なことは何かを考え、子どもたちが社会に出て、自分で考え、行動できるよう、地域社会で育てようとする活動ミッションもぶれることはありません。

評価されることで自信を無くしてしまった子どもに寄り添い、一人一人を認めながらも社会で大切な事をしっかり教えています。

「こどもごはん」も、そのミッションのもと、子どもでもできる食事作り、生活のスキルとして実施しています。2つの活動とも、無料で使用できる場があり、運営費もかからない工夫をしていました。

「課題は？」とお聞きしても「大切だと思うことを、無理せず、楽しく、やりたいことをやっているだけだから」と語るお二人の表情は明るく快活です。そう言いながらも、他の居場所の立ち上げを手伝ったり、個人のネットワークを使って居場所の担い手を発掘するなど、地域に居場所が広がることの大切さを感じ、支援していました。



Problem Solving

Case 7



空き家を利用したコミュニティ

街の家族

青葉区

- | | |
|-----|-------------------|
| 課題1 | 活動目標の決定・役割の設定と運営 |
| 課題2 | 運営方針・資金の確保(立ち上げ期) |
| 課題3 | 利用者と担い手の確保と対応 |
| 課題4 | スキル(人材養成) |
| 課題5 | 資金と場の確保(現在・今後) |

空き家を利用したコミュニティ

街の家族 どんな時もつながり合える居場所



青葉区奈良町一帯は、駅から離れた住宅地、宅地開発後 50 年が経ち高齢化が進む一方、転入子育て世代も目立つ地域です。「街の家族」は住宅地の中の空き家になっていた一軒家を利用した地域のコミュニティハウス。誰でも自由に入出入りできる、美味しいご飯も食べられる、赤ちゃんからお年寄りまで多世代が交流する大家族のような居場所です。

この方にお聞きました

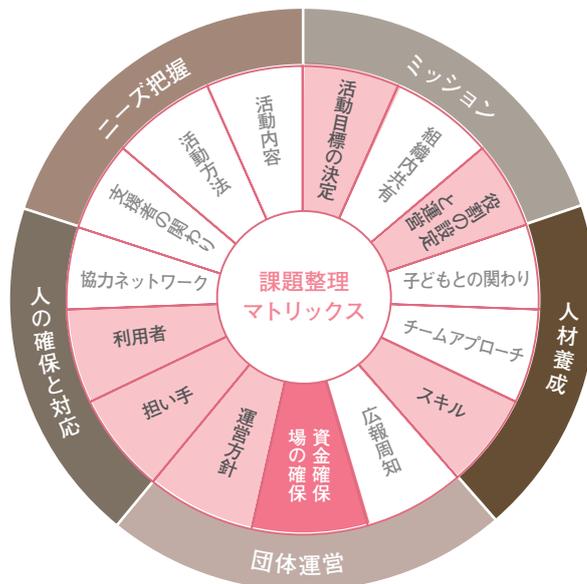
PROFILE

小笠原 弘さん (77 歳)



事務局担当。青葉区内在住。

現役時代はエンジニアとして海外でのシステム開発に従事。退職後、地区センターの館長・副館長として 10 年間施設を運営していたが、その経験で、定年後の男性が地域と繋がる「本当の意味」での居場所がなかなか見つけれない、公共施設、地区センターやコミュニティハウス、ケアプラザなどではできていないことに気づき、住宅地の一軒家を利用した地域コミュニティハウスの運営に取り組んでいる。



活動のきっかけ

東日本大震災の後、小さい子どもがいるお母さんたちから、安心して子どもを外で遊ばせることができない、屋内で少人数でも活動できる場所が欲しいという要望が聞こえてきました。また、大災害を経験して、災害時に必要なことは、住民の互助、地域の繋がりにあることを確信しました。社会の中で、近隣で、人間関係が希薄になっていると言われる今、世代を超えた繋がりの再構築の必要性を感じていました。

ちょうどその頃、空き家利用をコーディネートする大学の研究室、NPO 法人などの協力で現在の活動拠点となっている家のオーナーと出会うことができました。オーナーさんは「愛する町に活かせるのであれば、できる限り活かして欲しい」と、ご自分の所有する建物を格安の家賃で利用させていただくことになりました。この空き家を活かして地域の居場所づくりが始まりました。地域との話し合いを重ね、2012年6月、住宅街の一軒家に「街の家族」が誕生しました。

私たちのミッション

「街の家族」は地域のコミュニティの場として、子育て世代とシニア世代が出会い、子どもを見守るための繋がりづくりと共に、子育て世代も、シニア世代も生き生きとまちで過ごし活動することを活動のテーマとしています。

地区センター、ケアプラザ、コミュニティハウスなどは、地



所在地 横浜市青葉区奈良町 1566-332
URL http://www.machinokazoku.info
開設年月日 2012年6月
活動内容 □多世代交流の居場所
 ・地域食堂（昼食の提供 1食 300円～500円）
 ・親子おしゃべり広場
 ・シニアおしゃべり広場
 ・自主事業
 ・季節のイベント

開催日 毎週火・木・金 ※水曜日は不定期
 10:00～15:00（出入り自由）
利用料 1家族1回100円または月1000円
 ※子育て中の家族は月500円

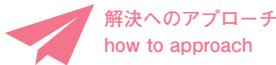
地域の拠点には違いがありませんが、住民が自分の居場所と感じ、そこで主体的な活動をする場にはなっていないと感じていました。

昔の長屋の井戸端やお寺の境内等、自然に人が集まり、そこに行けば仲間に出会える。それが本来の居場所と考えています。立派な場所でなくとも「人ありき」。緩やかに繋がり、雑談の中からやりたいこと、出来ることを形にしていく居場所づくりを心がけています。

課題1

活動目標の決定 役割の設定と運営

I 目指す方向性の共有・「なぜ創るのか」



目指す方向性を定めメンバー・地域との合意形成を図る

働く世代人口減、子育て家族の共働き化、シニア世代の独居化進行など、広い世代の暮らしの変化から、外部地域からの転入者が増えていることなど、今、起きていることのすべてが、地域住民間の関係の希薄化が進むことにつながっています。

なんとかしたいという想いが芽生えていた頃、3.11（東日本大震災）後、横浜で避難生活をされる家族に、青葉区奈良町で長く空き家になっていた自身の住宅を無料で提供していたオーナーに出会いました。

オーナーは、自分の家を地域に引き続き活かしたいと思っており、私たちは、仲間の中でよく話題になっていた「非常時・災害時に本当に頼れる地域づくり」の拠点にすることができないだろうかと考えました。地域の有志に声をかけ、普段の生活の場で、皆ができる力を出し合って作り上げる、どんな時もつながり合える「街の家族」の企画を練りヨコハマ市民まち普請事業※1に提案することにしました。

「街の家族」の場合は、物理的な「場」には、幸運にも初期

※1 ヨコハマ市民まち普請事業

防犯、防災、多世代交流、環境保全等分野を問わず、地域の問題を解決したい、地域の魅力をもっと高めたいという市民の想いを実現するための施設整備に対して支援・助成を行う事業。

段階で恵まれていましたが、その場（地域の中にある民家）を活かしつつ、「街の家族」をどう具体的にしていくのかは白紙の状態でした。開設する居場所が、地域の住民にとって資するものにならなければ意味がない。メンバーの「街の家族」のミッションに関する合意形成、住民へ、理解と協力を求める方法を見出し、取り組んでいく必要がありました。

そこで、助言などを求めるために、「ヨコハマ市民まち普請事業」に手を挙げました。この事業にエントリーできたことで、地域の取り組みをする市民団体に対して伴走的な支援をしているNPO法人横浜プランナーズネットワークのメンバーの方々力を借りることができて、2年間をかけて、コアメンバーの中で「街の家族」の目指す方向性を確認すると共に、地域住民とも共有する手掛かりができて、「街の家族」開所にこぎつけることができました。

II 担い手の役割



中心メンバーの役割分担を決める

地域住民の理解と協力を得て、「街の家族」を育てていくために、立ち上げ期から、運営の核になっていたコアなメンバーは、折々に想いを伝え合ってきました。

更に、具体的な活動に発展させていくためには、メンバーのそれぞれの強みも活かしながら、活動を展開させていくことが必要と考えました。それで、主な役割の分担もすることにしました。

- ・申請書類や渉外は小笠原さん（地区センター管理の経験）
- ・日常の組織運営は、岩間さん（NPOの経験）
- ・子育て親子への周知、相談は押久保さん（子育て支援者の経験）



課題2

運営方針 資金の確保（立ち上げ期）

I 場を活かし、何をするか



住民“みんな”のために“みんな”で創る

自治会や学校を中心とした地域の行事やそこに集う人のつながりはあるものの、世代を超えた新たな人の関係を生み出すような取り組みが地域にはありません

「街の家族」の活動は、伝統的な活動にプラスして、多様な世代の人が、それぞれ力を出し合って、日常生活に近い場所でのつながりを作り、結果として暮らしやすい、安心・安全で子育てがしやすい街づくりをしていこうとしていました。

拠点に来ていただいた住民へのアンケートやじかに聞く声、オーラルヒストリー調査^{※2}、まちの資源調査など進めながら、具体的な活動が浮かびあがってきました。

- ・食事の作り合いと食事づくりが学べる「憩いの台所」、
- ・子育てを支援する「街のリビングこども」
- ・庭造りや野菜栽培等を行う「憩いの庭」

この3つの事業を活動の基本にしました。地域のために活かして欲しいとお借りした民家が日常的に身近な横のつながりを醸成する活動拠点になりました。

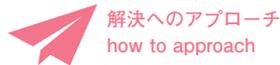
※2 オーラルヒストリー

歴史研究のために関係者から直接話を聞き取り、記録としてまとめること。政治史・労働史・地域史などのように、歴史研究の方法としてフィールドワークの伝統が根づいているところや、学際的な交流がなされてきた研究領域で発展してきた。

※3 よこはまふれあい助成金

より豊かな市民社会の実現のために、市民の自発性のもと、横浜市内で行われる非営利な地域福祉や障害福祉推進事業の支援を目的とした助成金。

II 運営方針を実現させる資金確保



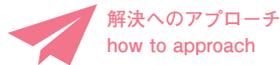
さまざまな助成金の活用

この間、横浜市社会福祉協議会よこはまふれあい助成金^{※3}、生活協働組合パルシステム神奈川ゆめコープ市民活動応援プログラム助成金^{※4}を頂き、台所のオープンキッチン化、交流の場としての庭の整備や菜園の造成、通路や階段の手摺など、活動拠点の環境を整えてきました。これらの事業ベースの上に、利用者やまちの意見、要望を柔軟に受け取りながら、身近な生活圏の家族的な横のつながりを広げる活動「“こんにちわ！”街」を現在進めています。「人は人の中にいるのが好きだから」を皆で心に刻みながら…。

課題3

利用者と担い手の 確保と対応

I 場の認知と活動への理解



気になる場所から馴染みの場所に！

具体策

①子育て親子にとって、気になる場所⇒居心地よい場所に

開所当時は、「街の家族」が何をする所か住民にはなかなか理解してもらえませんでした。はじめに積極的に利用し

※4 神奈川ゆめコープ市民活動応援プログラム助成金

市民活動助成金は組合員が商品やサービスを利用することで生まれた剰余金を基に、誰もが安心して暮らしていける社会と地球環境を目指す市民活動を資金面で支援する仕組み。



てくれるようになったのは、子育て支援関係で、地域に声をかけた乳幼児とその保護者でした。「なんとなく気になる場所」から声をかけられて行ってみたら「居心地よい場所」に。継続的に訪れる親子になってくれました。

お母さんたちは、口コミや、SNSなどで保育園や幼稚園の親子に「街の家族」の情報を広げてくれました。また、保育園の園長が「街の家族」を地域の子育て支援や相談の場所として紹介してくれるようになりました。子どもが小学校に上がると、PTAやキッズクラブなどで情報を広めてくれます。

こうして、利用するみなさんの力もあって、利用者が広がるようになりました。現在でも子育て世代の利用が70%を占めています。

②新しい住民の孤立防止に活かす

中心メンバーの小笠原は、奈良地区の住民ではなく、区内の他の地域に住んでいます。青葉区内も規模の異なる自治会町内会、また、地区社協のエリアなどの区割りがありますが

住民のための取り組みには組織ごとに温度差があるし、自分の住まいから拠点までの距離も自分の所属する自治会の拠点が距離的にも行きやすい場所にあるとも限りません。

「街の家族」は民間の活動なので、どの自治会員であっても利用することができます。他地域から転入してきた住民などは、是非、気軽に利用して欲しいと思っています。初めてやってきた方、散歩の途中に立ち寄った方、どなたにも「いらっしやい、どうぞ!」と優しく語りかけ、友だちの家を訪れたかのような居心地の良さを提供しています。

③シニア層の活躍の場に

利用が増えると地域全体に「街の家族」の存在、活動が伝わっていきました。増えたのは、利用者ばかりではなく、「街の家族」への協力者も増えてきました。まさに「街の大家族です」(笑)。例えば、頻繁に利用されているシニアの男性は、お昼ご飯の食器を洗うことが自分の役割となっています。

「街の家族」は訪れる人が「お客さま」ではありません。自分の家で過ごすように役割をみつけて活動します。利用している人同士が助け合います。「自分の役割があること」は、安

心して利用できる場として大切なことなんだと発見しました。

利用者から担い手に、人材の循環

時間の経過とともに、乳幼児の子育て世代のお母さんの子どもが小学生になり、親に連れてこられてきていた子どもが、自分の活動する場として「街の家族」を利用するようになります。ここまで成長すると、この子どもにとって「街の家族」は長年利用した、勝手知ったる場所です。そうなれば、彼らは利用者である反面、担い手になります。

また、子育て期に「街の家族」を訪れて、親同士の仲間づくりをして利用をしていたお母さんが、子どもが小学校に入学する頃になると、小さな子どもの子育てママに、先輩ママとして相談に乗ったり、得意なことを活かして、「街の家族」で活動するなど、利用者がいつのまにか担い手もしているといった、継続して活動しているからこそ、柔軟な場所になっています。

「居場所にいる」から果たせる役割

「居場所がある」から救われる人

具 体 策

①赤ちゃんがいる居場所

「街の家族」は、親子の居場所、遊び場所、相談場所であると同時に、地域の高齢者のサロンの役割も果たしています。「街の家族」に赤ちゃんがいるというだけで、赤ちゃんの笑顔、泣き声、ふれあい、抱っこ、それらが高齢者を笑顔にします。赤ちゃんの成長を母親と一緒に喜ぶ関係性がうまれたら、更に生きがいにつながります。高齢者に「何かしてあげる」より、高齢者自身が「何かしたい」がかなえられる場にこそ、人を元気にする力があると感じています。

②おじいちゃん・おばあちゃんがいる居場所

核家族化が進み、子どもと祖父母がふれあう機会が少ない中、街の家族ではおじいちゃん、おばあちゃんが、子どもの遊び相手になります。高齢者にとっても地域の孫育ての場にもなっ



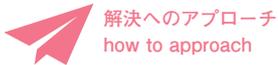
ています。自然にふれあい、ちょっと見ていてあげる、ちょっと手をかす、ちょっと教えるなどが無理なく行われています。

③ 不登校の子がいる居場所

親子で訪れていた子どもたちが小学生になり、一人であるいは友だちと遊びに来たりします。中には不登校気味の小学生が、2階のカフェに来たり、平日の日中に過ごしたりすることもあります。小さいころにお母さんと来ていた「街の家族」が、学校には行けなけれど行ける場になっているのです。居場所のスタッフや利用者も「不登校の子」という意識はなく、小さい頃からきている子どもが遊びにきているという認識です。

課題4 スキル(人材養成)

I 多様な世代の発想を活かす



解決へのアプローチ
how to approach

色々な世代の企画と実践が地域をつなぐ

具 体 策

① ミシンカフェ

若いお母さんたちが子どもの入園入学に際して必要な手作り品の制作に悩んでいるという情報をキャッチして、定期的に木曜日「ミシンカフェ」を実施。雑談の中から、こんな企画があったらなを実現します。

② 生活の知恵を伝える場

お昼の食事をおばあちゃんと母親と一緒に作りながら、おしゃべりに花を咲かせつつ、お惣菜の作り方を覚えます。子どもたちも作ったご飯と一緒に食べますが、好き嫌いのある子どもも一緒に食べられたりしています。他に、若い世代の家庭では、あまりしなくなった味噌づくり・梅干しづくりなども、若い世代に伝えています。災害の備蓄としても活用しています。

③ 広報紙制作はITスキルのある若い世代が担当

若い世代はスキルを活かし広報紙「街だより」も毎月欠かさず作成して配布しています。ホームページやSNSでの発信もとてもうまく使いこなしています。これができていることで、「街の家族」の周知は一層広がっています。

④ 若い世代の取り組みから収入を得る道の模索を

シニア世代は居場所で何か担うことで「やりがい」を感じ満足していますが、若い人はそれだけでなく手づくり品などを街の家族で販売、また、カフェの運営などで、多少のお金を得る仕組みも作り、継続して活動出来る仕組みを作っています。共働き家庭も増える中、若い世代には、個人の収入にもつながるような次の段階の仕組みが必要になってきているように思います。これから、更に検討していく必要があります。

課題5 資金と場の確保(現在・今後)

I 空き家利用の継続のための資金確保の困難性



空き家維持の経費捻出に悩みは続く

現在、運営の経費については基本的に利用者（担い手、ボランティアも基本は利用者として負担する）の利用料（1回100円）、食事代（300～500円）、お茶代、講座、イベントの参加費、これに加えて、各種の助成金（民間等）や寄付などによって、家賃や光熱費、他の経費を賄っています。

しかし空き家の維持には修繕などを考えると経費がかかります。空き家活用当初の行政の支援、制度はいくつかあるようですが、継続のための支援策はありません。

小規模多機能拠点の必要性

具 体 策

① 要支援・要介護の高齢者が通い続けられる「街の家族」に

開設から7年が経過して、地域の子育て世代のための居場所、元気なシニアの居場所を緩やかに実現してきました。子どもは学齢期になり、その親たちは子育てから少し解放されて、自分の仕事や活動などに踏み出し、新たな乳幼児子育て世代が加わっています。他方、高齢者が年齢を重ねて、要支援など介護予防が必要になる方も出てきました。

これらの人たちが「街の家族」を利用し続けられるようにする。また、介護施設などと並行して利用できるようにするために、どのような方策があるのか模索中です。

② 多世代交流を活かし、介護予防の場としての機能を

「街の家族」を運営してきて気づいたことは、高齢者と子

ども、また子育て中の若い世代等が共にいて、交流することこそが、高齢者の介護予防であり、子どもやその親にとっても、安心を得ることができるのだということです。「街の家族」の取組は、こうしたことを発見できたこと、地域みんなで、そういう場を継続していることだと思います。

今後はこうした考え方や実績を活かして、横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業（サービスB）^{※5}等制度サービスへの参画・申請も視野に入れていきます。

③ 小規模多機能拠点+まちづくりセンター機能を備える

地区センター、コミュニティハウス、ケアプラザ、スポーツセンター、図書館など様々な市民利用施設がありますが、それぞれが行政の縦割り制度の中で機能が分化され、まちづくりの拠点としての役割を担う場がありません。市民のためと言っても利用団体のための場所となってしまう。横浜市には子どもが自由に利用できる児童館がありません。市民利用施設を自分たちの街づくりに活かしていくとする住民の問題意識の弱さも課題であると思います。

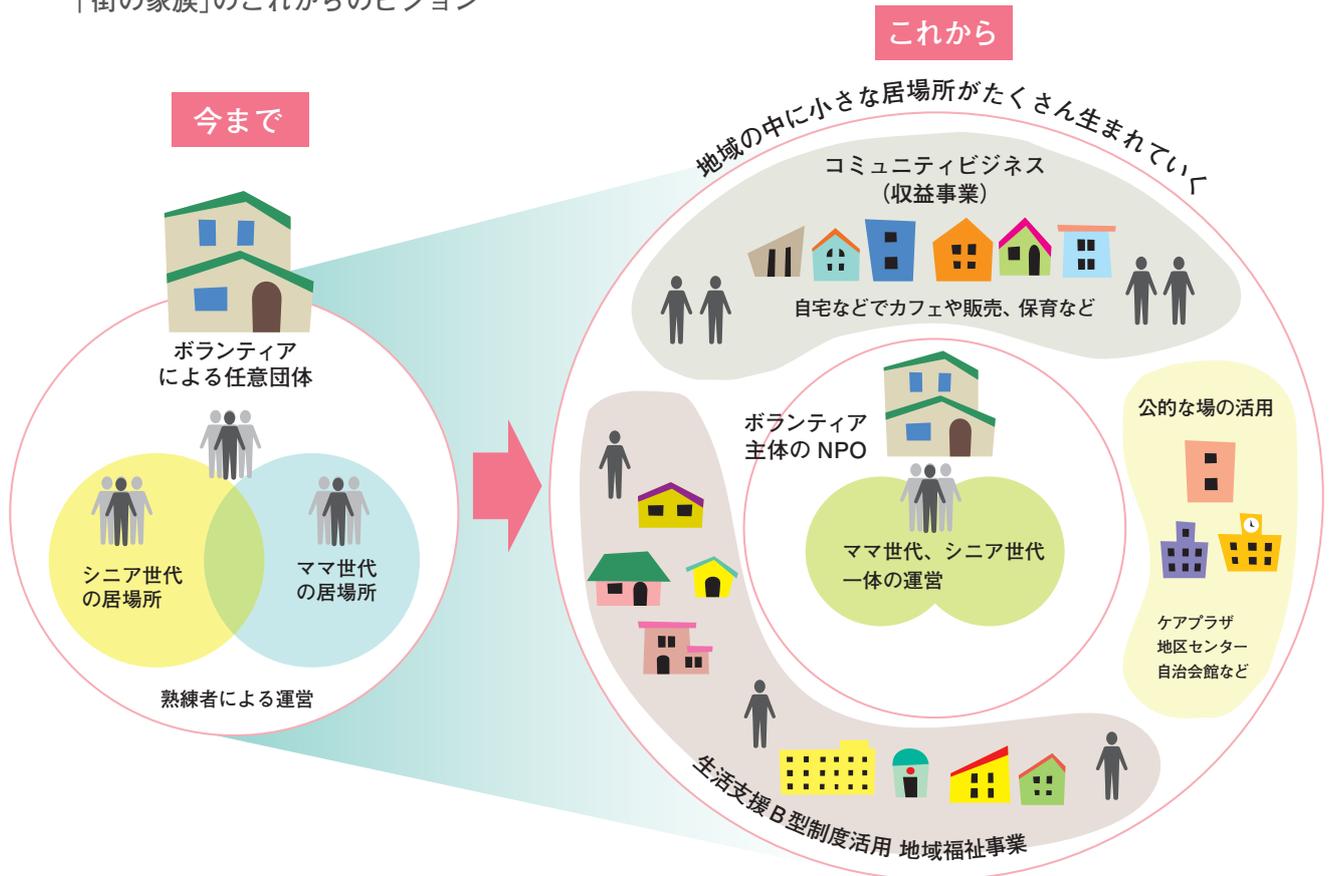
「街の家族」では、今後公的な制度を利用して運営を活性化するとともに、多世代の共生、本来の家族的な居場所づくりの大切さを、実際の居場所の運営を通して、多くの人や行政にも理解してもらい、子どもたち、親たち、その上の世代それぞれが生き生きと緩やかにつながれることを目指して活動していきたいと考えています。

※5 横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業（サービスB）

ボランティアを始めとした地域住民の方々が、要支援者等の方に向けた介護予防・生活支援の活動を行う場合に、その活動に係る費用に対して、補助金を交付する事業。



「街の家族」のこれからのビジョン



取材を終えて

「街の家族」は、地域での、また、世代間での関係の希薄化や人々の暮らしの孤立などに課題を感じ、地域での課題解決を目指して立ち上がった団体です。7年間の間に、当初の目的は達成され、活動は発展しています。

活動が優れていると感じたのは、まず、一人の想いを、他者と共有し、合意形成をはかり続けて、一步一步取り組みを発展させる姿勢です。コアな3人のメンバーから「街の家族」を理解し共に歩む地域の人々がどれほど広がっていることでしょう。

更に、どんな具体的な取り組みをするかについても、多様な世代の、多様なネットワーク・情報・スキルを持つ、地域の住民のチカラを活用しています。小さな拠点ながら、様々な活動を展開し、人を集めることができているのは、単に利用者を集めているのではなく、「街の家族」という拠点のなかで、人が対話し、知り合い、互いを理解しているからこそ、こうした、人を活かすということが成功していると思いました。

また、場の確保に関しては、発足当初の地域の住宅

オーナーとの出会いがありましたが、この維持継続、また運営資金の確保などは、多様な助成金のリサーチや申請など、コアメンバーの役割分担の役割が果たされているからに違いありません。

しかしながら、「街の家族」としては、新たな局面も迎えているように思いました。継続しているからこそ、多様な利用者を受け入れ、利用を継続できるように対応するための市民活動を支援する制度の不足。あるいは、「街の家族」があるから幸せに地域生活を営んでいる人々にたいして、代替的な縦割りを越えた柔軟な制度サービスが無いことに気づかれていることです。また、多角的な取り組みを継続する中で、安定的な資金の確保によって、スタッフの賃金や必要な経費を捻出する必要があることも模索する必要性が出てきていることです。

これまで、努力されてきたからこそ、向き合っている課題と思いますが、是非、団体を越えた、居場所の取り組みをされている団体ともネットワークを広げ課題解決に近づけますようにと思いました。

編集後記

「横浜市子どもの居場所づくり 課題解決ケースブック」の制作にあたり、市内、約 50 か所の居場所活動を対象にアンケート調査を行いました。

回答から、市民を中心とした多様な居場所が、子どもや若者と向き合い、時に、その家族や地域とも向き合い、健やかな子どもの成長を願い、主体的に、活き活きと活動していることがわかりました。

一方、それぞれの居場所は、様々な課題も抱えていました。乗り越えようとしている課題も、努力によって乗り越えることができた課題もあります。

しかし、どうしても自らのチカラでは解決できず、立ち往生している課題もありました。

これらのことを、他の子どもの居場所づくりをされている方々に参考として欲しい。また、居場所と居場所のつながり、居場所と関係機関等とのつながりが生まれ、広がるネットワークの中で、知恵と工夫を結集し、解決につながられたら…。

そんな想いや願いから、回答を頂いた活動団体から 7 つの居場所に取材をさせて頂き、「横浜市子どもの居場所づくり 課題解決ケースブック」が誕生しました。

取材に、また、原稿執筆にご協力いただいた 7 団体の皆さま、本当にありがとうございました。是非、沢山の方々に、ご覧いただきたいと願って編集後記とさせていただきます。

特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター

発行者	横浜市 こども青少年局
取材協力	金沢子ども食堂・ホットサロンすくすく／友ゆうスペース／おっち一塾／まんまるプレイパーク／山芋の会／アソシエーションてらこや・こどもごはん／街の家族
企画・取材・編集	NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター
デザイン・DTP	NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター
発行日	2020 年 2 月

YOKOHAMA

横浜市子どもの居場所づくり
課題解決ケースブック

Problem Solving Casebook

2020

